

『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵） 翻刻・解題十一

小谷成子・野崎典子

今回の翻刻は、『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻・解題十』（愛知県立大学日本文化学部論集 国語国文学科編 第1号 平成22年3月発行）につづくものである。

凡例

- 一、これは愛知県立大学附属図書館蔵『和泉流秘書』の翻刻である。
- 二、底本を忠実に翻刻することを原則とするが、通読の便宜や印刷上の制約を考慮して、次のような処理を施した。
 - 1、原文に句読点はないが、詞章の終わり等に一字分程度の空白をおいた。
 - 2、丁付けは省いた。
 - 3、曲中に付した／＼・シテ・アト・——等については、朱書・墨書の区別はしなかったが、朱書きの傍書に限って（ ）で括弧して示した。
 - 4、誤記と判断し得る場合も、修正しないで（ママ）と傍記した。

5、漢字の字体は通行の漢字に改めた。ただし、異体字、略体字は本字にした。合字は開いた。

𠂔↓喜 尸・鴈↓雁 メ↓シメ ち↓より

6、宛字も多くみられるが、そのままとした。

竹類（畜類） 御行所（御教書） 字文（呪文）

翻刻

和泉流秘書 七冊之内七

目録

長光	角水	茸	蜘蛛盗人
張章魚	六人僧	鞠座頭	連歌十徳
二人袴	鬼継子	牛盗人	柱杖
秀句傘	六地藏	雪打	
音曲聲	土産山伏	鶏猫	
算ノ目 ^(ママ)	松脂	蓮箸	
メ而廿一番			

アト 是は坂東方の者て御座る 急用有て都へ登る 先急て参ふ 誠ニ奉公人ほと急か敷い者ハない 此様にいつ何
 時其のふ都へ御使に行事ちや イヤとつと来たか爰ハとこちや 何に近江の国か すれば向に見ゆるハ水海か 都へは
 程近い急て参ふ ヤアのふくそこ元てと、めくは何ちや 何に大津松本の市ちやといふか 扱ゝ是ハよい所へ来合せ
 た ついてなから見物致て参ふ シテ 是は此辺りニ住居する心の直にない者て御座る 今日ハ大津松本の市ちやと申
 ニ依てあれハ参りひと仕合致そふと存る イヤあれハ田舎者と見へて市の躰を見物する ちときやつにたつさわつて見
 よふと存る アト ハア早や是か市場そふな 扱もく広い事ちや またあれからあれ迄つうと市場ちや シテ 市場
 共く アト 是ハ子供の持て遊びそふな シテ もて遊び共く アト ひゝなおき上り子法師 シテ はりこふり
 つゝみ アト 土て作たゑのころも有 シテ 誠ニゑのころも有 アト 是りや何を求ふと儘な事ちや シテ 其通り
 ちや 兩人 笑 太刀ヒク アト こりや何とする シテ ちよつとさわつたか何ちや アト 扱ゝ氣味の悪ひ者が居る
 あの様な者ニハかまわすと余の店を見物せう シテ 扱ゝうつけたやつかと思ふたれハ目のさやのはすれたやつちや
 ハア太刀を持ちかへた 致し様か有る アト ハア是は馬具そふな シテ 馬具共く アト 鞍泥障 シテ 化切
 付 アト 轡手綱 シテ 誠ニ手綱も有 アト ハア是ハけんふそふな シテ けんふ共く アト 沙後ちりめん
 シテ りんすはふたい アト 是りや何を求ふと儘な事ちや シテ 其通りちや 兩人 笑 アト こりや何とする
 シテ イヤ爰な者か 某かはいて居る太刀に手を懸て何とする アト 是ハ某のちやこちへおこせく シテ く
 アト ア、誰もないか出合へく シテ 出合へく 目代 是ハ先何とした事ちや アト そふ被仰る、ハ殿方て御
 さる 目 所の目代ちや アト 目代殿ならハ急度御礼を申ませう シテ 一礼申そう 目 イヤく礼ニハ及ぬ そ
 れを身共に預ケい アト 預るにハ及ませぬ私にて御さる 目 汝にて有ふとも 理悲を聞て渡そふ先預ケい アト

左右あらハアノ横着者ニやらせられて被下るゝな 目 心得た シテ 既ニ取られよふとした 目 ヤイ／＼ シテ
 ハア 目 夫を先身共ニ預ケい シテ 預るニハ及ひませぬ私のて御さる 目 理悲を聞て渡す先預ケい シテ 左右
 あらハアノ横着者ニやらせられて被下るゝな 目 心得たヤイ／＼ 汝はこの者ちや ニユク ア 坂東方の者て御さ
 る 急用有て都へ登り升 今日ハ大津松本の市ちやと申ニ依て是へ立寄見物致ておりましたれハアレ／＼ニ居る横着者
 か私の持て居る太刀をはきまして我か物ちやと申升 あのみふな者ニハ急度被仰付て被下 目 すれハ汝かのか ア
 左様て御さる 目 ヤイ／＼ 汝はこの者ちや アトノ通り 目 すれハ汝のか シ 左様て御さる 目 ハテ合点の行
 ぬ 壹ツ物に二人り主の有ふ様ハ無いかヤイ／＼ ア ハア 目 汝かのならハちはだ焼のよふ子を知つて居るか
 ア 如何ニも私の太刀で御さるニ依てよふ覚へて居り升 目 左右あらハ言へ ア いかニも申まするアノ者も申かお
 尋被成て被下 目 心得たヤイ／＼ シ ハア 目 汝か太刀ならハぢはた焼の様子を知て居るか シ いかニも私の
 太刀で御さるニ依てよふ覚へて居升る 目 左右あらハあの者も言おふといふか汝もいふか シ あのかやつか申そふ
 と申升か 目 中／＼ シ ア、きやつか存よふ様ハ御座らぬか迎も得申ハ致升まい 先あの者から言へと被仰て被下
 目 心得た先汝からいへ ア 畏て御さる先ひん抜てはゞき元貳三寸す、焼て御さる 夫より先ハ小乱ニ乱ており升
 じはだの様子を物ニたとへて申さは霜月しあすの薄氷の上に薄雪のはつとちりか、つた様な見事な焼て御さる 目 心
 得たサア／＼ 汝も言へ シ 心得ました アトノ通り 目 ハテ合点の行ぬヤイ／＼ 今度ハ国作を言へ ア 国は備前物
 て御座る 備前ニ取りても銘ハ長光長いハちようの字光ハひかるといふ字て御座る 目 心得たサア／＼ 汝も国作を言
 へ シ 国ハ アトノ通り 目 心得た汝かいふ通りニいふわい 目 合点の行ぬ事て御座る イヤ私か田舎者て御
 座つてこわ高に申を聞取て申てかな御座らふ 目 そふて有ふ ア そふあらハ今度ハひそかに寸の申ませう是へ寄ら
 せられ 目 是ハ一段ちや ア 是程て御座る 目 心得たヤイ／＼ 今度ハ寸の言へ シ 心得ました先ひん抜てはゞ
 き元二三寸す、焼て御座る 夫より先は小乱に乱ており升地はたの様子を物にたとへて申さハ霜月しわすの薄氷の上に
 薄雪のはり／＼ 目 ヤイ／＼ シ ちらり／＼ 目 ヤイそこなやつ シ ハア 目 夫は地はだ焼の様子ち

や寸のいへ シ エミ寸て御さり升か 目 中 シ 寸ハ備前物て御さる備前にとりても銘ハ長光長いハこうゆう
長の字光はこう角ミのひつかりて御さる 目 ヤイ シ 寸ハア 目 夫は国作ちや 寸の言へ
ア 寸のいへ シ おのれか何を知りおつてすつこんておる 二人シテ手ヲ
トル目代右 目 寸の言へ ア すんの言へ シ や
あら此方ハ聞へぬ あのスつばめにひひきをさせらるゝの 目 ひひきわせぬ 寸の言へ ア すんの言へ シ よふ
御座るあの太刀壹トふりすつはめに取られたと思へはよふ御座る 爰をはなさせられい 目 はなす事てハない 寸の
言へ シ あ シ お方ヘキツク 兩人 扱 シ 悪ひやつ シ 是りや何とする ア きやつハすつはめて
御座る 目 早ふとらへい ア 扱 シ 悪ひやつ シ ア、ゆるして呉い 目 己またそこに居るか シ
ア、ゆるして呉い 兩人 やるまいそ ア ちやつととらへさせられい シ

シテ 盗人 羽織半下片タスキカケ色、
ツケル

アト 使者 半上下クミリ太刀持出ル

アト 目代 長上下

入用 太刀

張章魚

シテ 大果報者天下泰平ニ納り目出度御代なれば上ツ方のお事ハ申ニ及す末ミに至る迄存るまゝのお正月て御座る
扱毎も一族達へお節を申又毎年嘉例て張章魚をつかふ 用意を致した事か存せぬ先太郎官者を呼出し承ふと存る 太郎官
者おるかやい 太 ハア シ 有るか 太 ハア シ 居たか 太 お前に シ 扱何と思ふそ毎も春といへは目出度

物ちやか今年のよふな目出度い能ひはるハないナア 太 御意被成るゝ通りいつゝよりもお目出度いお正月で御さり
 升 其通りちや扱毎も一族達へ御節を申又毎年嘉例で張章魚をつかふ 用意ハあつたかいナア 太 ハア大方の物
 は見当りましたか左様な物は存ませぬ 其ちか知らすハまた調べて有ふ 最早近日の事なれハ用意をせすハ成まい
 爰元ニハない汝は太儀ながら京江いて張章魚をこうてこい 太 アノ私か都へ参り升か 其の事てハない 其わるいハい
 い 太 畏て御さる 扱ちと好か有る 太 夫は如何よふなお好て御座る 別の事てハない 其わるいハい
 かそろわぬ物ちやよいのを尋て随分いほの揃ふたを求めて来い 太 ハア何やらむつかしいお好てハ御され共畏て御座る
 左右あらハ急て往てやかて頼れ 太 ハア エイ 太 ハア エイ 太 ハア エイ 太 ハア引
 のふゝ嬉敷や一段の御用を被仰付た先急て参ふ 道行 誠ニ某ハついに今迄都へ往た事ハなかつたに此よふなさい
 わいな事ハ御さらぬ ついてなからこゝかしこの名所きうせきをも見物致て参ふと存る イヤ何角と言ふ内に都ぞふな
 ハミア是りや都の町ちや 聞、およふたよりハ家居杯もきれいな事ちや イヤ何やら色ゝの物があるハ イヤ是二付
 て思ひ出した事がある 某わ張章魚を知らぬ 在所てとくと尋ねて来れハよかつた物を京へゆけと被仰たか嬉しさに
 いわすれた来たそんな事をしたと言ふて是はるゝの処をといにハ戻られす是ハ先何とした物て有ふぞ ハミアさすか
 ハ都ちや 売買ふ物を呼はつてあるけハ物事と、のふと見へた 某も此当りから呼はつて参らふ 止、申そこ元に張た
 こハ御さらぬか はりたこか求とふ御さる はりたこかおふゝゝゝ スツハ 是はらく中ニ住居するこゝろのす
 くない者て御さる あれへ田舎者と見へて何やらはつはと申 ちときやつにたつさわつて見よふと存る ヤアのふ
 〳〵そこな人 太 ハア、此方の事て御さるか 如何ニも其方の事ちや そつしなから此広イ海道を何をはつ
 はとおしやる 太 田舎者て御されハリやふしハ申さぬ 真平御免なれ イヤゝりよふしをおしやると言ふてハ
 ない 何やら用有そふな躰ちやニ依てもし事ニ寄たらハ叶へてもおまそうと言事ちや 太 夫は忝ふ御さる私わ張章魚
 か求たさにか様に呼はつてあるき升 ムウして其張章魚をとの様な物ちや知て御居やるか 太 是は都人とも覺へ
 ませぬ存せぬニ依てケ様に呼はつてあるき升 是ハ身かあやまりちや扱ゝ其方ハ仕合な人ちや 太 仕合と申て

もこう見へた通りの者で御さる ス イヤ／＼其様に袖妻に付た仕合へない 某におしやつたか仕合といふ事ちや
太 其方ニ逢ふたか仕合とハ何とした事で御さる ス ふしん尤ちや らく中に人多しとハいへ共其方の御尋やる張章
魚屋の亭主ハ某壹人ておりやる 太 アノ其方かはりたこ屋の御亭主で御さるか ス 中／＼ 太 すれハ身共ハ仕合
な者で御さる 張章魚か求とふ御さる見せて被下 ス 如何ニも見せよふ先夫ニ御待やれ 太 心得ました ス 田舎
者をまんまとたはかつてハ御され其何を張たこちやといふて売てやらふ物かない 是ハ先何とした物で有ふそ イヤ
こゝに古大いこか有る是を何とした張章魚ちやといふて売てやらふと存る 取 二入のふ／＼お居やるか 太 是ニおり升
ス さらに張章魚を見せう 太 とれ／＼見せて被下 ハア是ハ入ませぬその張章魚を見せて被下 ス 扱はお主ハ
真実はりたこをお知りやらんと見えた 全躰是ハ張鮠といふ物でハない 実わ張太鼓といふ物でおりある 太 ハア張
太鼓といふ物で御さるか ス 中／＼ 太 ハアても頼ふた者はたしか張たこと申されました ス いや／＼夫は其方
の間違ちや して先何に成と仰られた 太 一族達の節につかふといわれました ス ハア節ニおつかひなさる 尤さ
うて有う羯鼓八撥張太鼓といふて児若衆の持て遊被成ニ依て節のお座敷になうて叶わぬ物ちや 夫故此中ハあなたこな
たから大分取に来て最早是壹ツなれとも望ならハ売てもやらうかと思ふ事ちや 太 夫は忝ふ御さる成程求とう御さる
すれは身共か間違ひと見へました 扱ちと好か御さる ス 夫ハいか様なお好ちや 太 其事で御さるわるいのハい
ほか揃わぬ程に随分いほの揃ふたよいのを求めて来いと申されて御さる ス ムウ扱／＼頼ふた御方ハ張太鼓か御功者ちや
成程わるいのハ此いほか揃わぬ おしやる通り随分よい張太鼓ちやニ依ていほかよふ揃ふて有 太 いか様よいいほて
御さる求とふ御さるか代物ハいか程で御さる ス 千疋ておりある 太 あのはか千疋で御さるか ス 中／＼ 太
扱／＼高直な物で御さるちと負て被下 ス イヤ／＼此張章魚ニ限て負ハない いやならハおかしませ 太 左様ならハ
求ませう是へ被下 ス 心得た 太 扱代物ハ三条の大黒屋^ニ渡すて御座らふ ス 如何ニもあれて請取て御さらふ
太 左右あらハもふこふ参る ス ア、是／＼ 太 何て御さる ス 其方ハ余りきみのよい買てちや程にみやけをお
ませう 太 夫は忝ふ御さる是へ被下 ス いや／＼其よふ二手ニ渡ス物でハない見れハ其方ハ主持そふな主といふ者

は機嫌のよい時も有り又悪い時も有る物ちや其御機嫌のわるい時さつそく御機嫌の直るはやし物を教へておませうといふ事ちや 太 夫は忝ふ御さる教へて被下 ス ひそかに教ふ是へ寄らしませ 太 心得ました ス といふて 太 ハア ス ひよふしに懸てはやさしませ御機嫌の直る事で御さる 太 夫は忝ふ御さる左様ならハもうこふ参る ス 最早御ゆきあるか 兩人 さらハくくく 太 やれく嬉しや一段の張太を求た先急て帰ふ 誠ニ某ハ此度都始ての事なり其上はりたこといふ物ハ知らす迷惑いたす所によい張蛸か手に入て此よふな嬉しい事ハない定メて頼ふた お方の御満足被成るゝて有ふ イヤ何角といふ内に戻た先是ハ爰において 頼ふたお方御さり升か シ イヤ太郎官者か戻たそふな 太 御座り升かく シ 戻たかく 太 御座り升か御さるか シ 戻たかく 太 御さり升か シ エイ太郎官者 太 ハア シ 戻つたたか 太 唯今帰りました シ やれく早かつた何と張章魚を求て来たか 太 一段の張蛸を求て参りました シ 夫は出かした急て見せい 太 畏て御さるハアさらハ御ろふせられませ とれく汝ハやさしい者ちや 悴へ京の土産に求て来たかよい太鼓ちや 是ハ歛てあらふ 先其張蛸を見せい 太 扱はこなたニも篤と御存ないと見へました則是か張蛸て御さり升ス シ 何に夫か張章魚ちや 太 左様て御さり升ス シ とハ何とした事ちや 太 其事て御さり升スこなたニも仰られよふかわるうこさる都の者か申升ハ実ハ張蛸といふ物てハない張太鼓ちやと申しました シ 何張太鼓ちやと思ふてかうて来たか 太 左様て御さり升 シ 是ハいかな事 扱くうつけたやつ の すれは都へ往てぬかれて来たハ 太 いかなくぬかれてハ参りませぬ シ ムウ夫ならハ節につかふといふたが夫か節の用ハたつか 太 たち升とも羯鼓ハ撥張太鼓と申て児若衆の持遊に成り升ニ依て節の御座敷になうて叶わぬ物て御さる此中ハ節の御用て方くから取りニ参りまして是壹ツニ成りましたを私か色くと申て求て参りました シ 夫ならハ好ハなんとした 太 そつともぬかる事でハ御さりませぬ お好に合て参りました 彼のわるいのハいほか揃ませぬ 是ハよい張蛸て御さるニ依てこらうせられませ何とよう揃うたいほてハ御さりませぬか シ 言語同断うつけたやつ の うまんく とぬかれて来おつた 己かよふな者ニハ重ての為ちやいふてきかさう張蛸といふハ料理につかふ蛸の干たを張たこといふ 太 ハア、 シ いほのよふ揃ふたといふわ則蛸の足のいほの

事又節二つかふといふたハ節の料理につかふ事ぢや 太 ムウ あゝの其太鼓か料理二つかハるゝ物か 太 ハアす
れハ章魚のほしたのならハあのほした蛸の事で御さり升か シ おんてもない事 太 是ハ如何な事 私ハ又都の者か
張蛸といふ物てハない張太鼓といふ物て節のお座敷になうて叶わぬ物ぢやと申てこさる二依て成程尤な事ぢやと存てか
うて参りました シ またうつけた事をぬかす 都の者か何といへハとてかうてうすると言ふ事がある物か 太 左様
ならハ又此方も又仰られよふかわるう御さる シ 何かわるい 太 はてお料理におつかひなさるゝ物ならハ料理二つ
かふ蛸の干たをかうて参れと仰らるればよふ御さるに何やらまきらはしい事を仰られました二依てか様な事で御さる
是ハあなから私か不調法てぬかれたでもないかと存升 シ 己は悪ひやつの利根立をぬかしおる しさりおろ 太 ハ
ア シ またそこに居るかあちへうしよ 太 ハア シ しさりおろ 太 ハア シ しさりおろゝゝゝゝ 太
ハハアア引 シ 悪ひやつの 太 以ての外の御機嫌ぢや イか様よ思へは遂に此太鼓を張たこといふた事もない
兎角身共か張蛸を知らなんだかあやまりぢや 都のやつめか何やら面白おかしう言ふてうまんゝとたましおつた
早ぬかれたハせひ二及はぬか此御機嫌は何として直した物て有うそ アゝさすかは都の者ぢや ぬく共只はぬかいて御
きけんの直る囃子物をおしへて呉た何とやらて有たか ヲゝ夫ゝ張太鼓と申ハゝ中に木をわけ入両に皮を当てさせ廻
りにいほの有をこそ張太鼓と申せ実ニもさありやよかりもさうよのといふ事で有た かうちやゝさらハはやそう 張
太鼓と申ハゝ中に木をわけ入両に皮を当てさせ廻（二）にいほの有をこそ張太鼓と申せ実にもさありやよかりもよのゝイ
ヤア張太鼓と申ハ中に木をわけ入 跡前頭之通 張太鼓と申ハ中に木を曲入 長ト エイ張太鼓と申ハ中に木を曲入○さうよの
ゝ シ 笑 太郎官者か某の機嫌をの直さうと思ふて拍子物をするアゝ面白わ ウイテ 是りや出すハ成まい いか
やゝゝ太郎官者 太 それあゝおこへちやゝゝ ぬかれたハ悪けれと拍子物か面白い 先内へ入てとしやうのす
しをほほうはつて諸白をのめあれ 太 張太こと申ハ中に木を曲入れ両に革をあてさせ廻にイほの有をこそ張太鼓と申
せ シ とかくの事ハいるまい早う来て餅くへ 太 両に革をあてさせ 云さうよのゝ シヤキリ シ イヤア

末広同断

二人袴

舅 是は此当りの者て御座る 今日ハ最上吉日なれハ髻が見ゆる筈や 先太郎官者を呼出シ申付ふと存る 太郎官者
 あるか 太 ハア 舅 居たか 太 御前に 舅 汝呼出ス別の事てない今日ハ最上吉日なれハ髻が見ゆる筈ぢや 見
 へたらハ此方へいへ 太 畏て御座る 舅 エイ 太 ハア ヲヤ 是ハ此辺りの者て御座る 今日ハ最上吉日なれハ
 悴に髻入を致ス様にと舅方から申て参た 用意致たか呼出シ尋う 髻屋より出ル 髻 と、様の呼はせらるゝそ
 ふな呼はせらるゝか何事て御さる 親 先ころ通らしませ 髻 心得ました 親 其方を呼ハ別の事てなひ けふハ最
 上吉日なれハ髻入をおしやるよふに舅方から言ふて来た 何か用意ヲおしやつたか 髻 いかにも用意致しました 乍
 去はつかしう御座るニ依て得行きませぬ 親 イヤ爰な人か 今と成てそのよふな事か有物か おゆきやらねハならぬ
 左右あらハこなた来て被下るゝならハ行ませう ヲ 扱ゝ氣の毒な人ぢや 左右あらハ舅の表てまていてやらう
 そ ム 夫ハ嬉しう御さる ヲ して袴の用意ハよいか ム 其様な物は用意しませぬ ヲ イヤ爰な人か 髻入に袴
 の用意をせいて何とならう ム 左様ならハ袴の出来る迄お延し被成て被下 ヲ また其つれな事をおしやる 是悲に
 及はぬ舅の表へいて某の袴をぬいてかしてやろうそ ム それハ忝ふ御さる ヲ それならハさあく おゆきやれ
 ム こゝゑました ヲ 扱あれへいたりとも何か氣を付ていんきんにゑしやくおしやれ ム はつかしい事で御さる
 ヲ いつまでも子供のやうにおもふておいやる必く 麓そうをおいやるな ム こゝろへました イヤ何角と言ふ内に
 是て御さる ヲ 誠ニ是ちやサア 此袴をぬいてかす程に是を着て案内をこハしませ ム 心得ました 袴ヲ色、
 うて御さり升か ヲ イヤ爰な物か 袴の着やうをしらぬか ム ついに着た事か御さらぬ ヲ 扱ゝうつけた人ぢや
 シテ見テ、 か

袴の着様をしらぬと言ふ事がある物かよふ覚へておかしませ 是へ足を入れさしませ ム こゝろへました ヌ
 ちらもいる、事ちや ム 是ハきうくつな物で御さる ヌ きうくつなど言ふ事がある物か よふ覚へさしませ ム
 是ハ六ツケ敷い物で御さる ヌ また其つれをおしやる 袴の着よふを知らぬと言うよふなうつけた事がある物か さ
 あよふおりやる案内をこわしませ ム 心得ました物申案内申 ム イヤ表に案内か有る案内ハ誰そ ム そちハ是の
 太郎官者か 太 左様で御さる こなたハ殿方て御さる ム 鞆か来たとおしやれ 太 畏て御さる ハア申上
 昇 何事ちや 太 鞆様の御出て御さる 昇 夫ハ一段ちや こふ御通り被成いといへ 太 畏て御さる こふ御通り
 被成いと申され升 ム 心得た 太 鞆様で御さる 昇 エイ鞆殿初対面て御さる ム 不案内に御さる 私もとふ参
 る筈で御さつたに何かとしておそなわりました 昇 此方の御隙のないはきゝ及ました 太 太郎官者鞆殿ハ独りか 太
 御門前ニ親子様かおいて被成升 昇 早うお通し申せ ム あれハ親共てハ御さらぬ 太 親子様と申事ハよふ存てお
 り升 昇 早ふ御通り被成いと言へ 太 畏て御さる ム 無用ニさせられい 太 こふ御通り被成いと申され升
 ム 何に身共か 太 左様で御さる ム 某ハ通るよふな者てハおりない 太 親子様と申事ハ私かよふ存ており升
 是悲共こふ御通り被成ませ ヌ とふあつても身共ハ通るよふな者てハおりない 太 いか様に申しても通るよふな
 者てハないと仰られてお通りなされませぬ 昇 すれハそちか見知らぬ者て有う 太 親子様と申事ハ慥ニ存ており升
 ム あれは親共てハ御さりませぬ 昇 左右あらハ是悲共お通り被成 左なくハ舅かお迎に参りませうかと言へ
 太 畏て御さる ム 無用ニさせられい 太 是悲ともこふお通り被成ませ但シ舅かお迎に参うかと申されます ヌ
 夫ならハそれへ参るとおしやれ 太 畏て御さる 舅へ言ふ舅シカく此内に親手ヲ
タミク鞆見ルトマネク ム ちよつといて参らう 昇 いて御さ
 れ ム 何て御座り升 ム 何て御座り升と言ふ事がある者か 某か出ねはならぬ 其袴をぬかしませ ム こなた
 も出させらるゝか ヌ 太郎官者か見知ていたニ仍て出ねハならぬサア手伝ふてくれさしませ ム 心得ました
 ヌ ハア出まして御さる 昇 最前からお通り被成いて ヌ ちとあれに用か御座りました先もつて今日ハ目出度ふ
 御さる 昇 言せらるゝ通り目出とお御さる 昇 太郎官者鞆殿を呼ませい 太 シカく ヌ 某か居て呼て参りま

せう 舅 太郎官者を遣わされませ 又私て御さるか 是ちや二依
 て袴の用意をおしやれハよいに 袴の出来る迄お延し被成て被下と申二是悲共といわせらるゝ二依ての事て御さる
 又 また其つれをおしやる さあゝ早ふお出やれ 出まして御座る 是ハ如何な又親子が見へ
 ぬ 早う呼うて来い 太 シカゝ 何又身共か 夫へ参るとおしやれ 太 シカ
 舅へ言ふ ちよといて参ふ 舅 扱ゝあちこちさせらるゝ事ちやナア 太 シカゝ 何て御さる 何
 てと言ふ事がある物か又身共か出ねハならぬ 扱ゝ掣入と言ふ物はせわしい物て御さる シカゝイロゝ
 舅 太郎官者今度ハ御兩人一所にお通り被成いと言へ 太 シカゝ 何に兩人一所か 太 左様て御さる
 夫へ参うとおしやれ 太 シカゝ 是ハ何としませう されハなんとするかよからうそ イヤ思ひ付け
 た そこを引かしませ シタニ居色、言テ袴トク此内ニ舅ニ斗リ
呼ニヤルシカゝイロゝアルナシ袴ニツナナル 二ツになりました 是てよい 身共か分別とし
 た 是をこう当る事ておりやる 成程聞へました 身共は是を当る事ちや 是ハ一段の分別て御さる
 其方からかならず見付られぬやうに氣を付けさしませ 身共は是を当る事ちや 是ハ一段の分別て御さる
 ムコヨリ 兩人共に出まして御さる 舅 最前から何をしてくさつた ちとあれによふか御さつた二依て遅なわ
 りました シカゝ 舅 太郎官者お盃を出せ 太 シカゝ 扱今日ハ最上吉日て目出とう御さる 舅 日
 柄もよふて目出とふ御さる (目出度ふ御さる) 御盃出しまして御さる 舅 掣殿それへ参らぬか 舅
 先こなたからお始被成ませ (ムコ 先まいつて被下 舅 左様ならハ始ましやふ 太郎持テ行 太 掣殿それへ参らぬか 舅
 是を掣殿へ進ませう 頂戴ませう 舅 あれへ持て行け 太 シカゝ 頂戴する 舅 慮外て御さる太郎
 官者つけ 太 シカゝ ムコノム ホ 舅 何とて御さつた 扱ゝ胸かひんやりとして能い氣味て御さつた
 舅 それならハも壹ツ参れ 最壹ツたへませう マクウケ 太 ホ 舅 何と御さつた 扱ゝよい酒て御さるこ
 うむもうからふいはらを引するよふな御酒て御さる 氣二入たらハ如何程成とも参れ 左右あらハ最壹ツ給へ
 ませう 舅 扱ゝ掣殿ハ酒か成てよい事て御さる 舅 あれハ一ツたへ升 舅 夫は一段て御さる シカゝ

舅へサス舅ウケ
舞コノム

何に舞ををまへて御さるか

舅 中く

私ハ舞ハ不調法で御さる

彼ハ舞ハ不調法で御さ

舅 此家の大法で御さる平に舞せられ

舅 何としませう

夫氣を附て舞しませ

舅 心得ました

目

出度かりける時とかや

タイコ頭タツ
ハイ左右シテ止ル

ハミア目出度ふ御さる

舅 目出とふ御さる

夫ハ余り短ふ御座る左

右江廻て長かくと舞せられ

其上舞ませうにもさす神かあつて舞る、事てハ御さらぬ

舅 何の舞にさす神とい

ふ事か御さらう 昔から三神相応といふ事か御さる三人相舞ニ致そう

太郎益持
入ル

是ハ迷惑で御さる

ムコヤイロく
シカくアリ

よろこひに又悦を重ねけり

タイコ頭三段ノ舞
ヤウ口伝

太 申く此袴を見させられ

兩人 笑

舅 扱くけふかつた事ちやナ

ア 太

シカく 兩人 是ハ面目も御さらぬ

舅 くるしう御さらぬ先待せられ

兩人 ゆるさせられい

舅 先待

せられ 兩人 面目も御座らぬ

太郎もシカくニテ
留ル心ナリ

アト 舅

長上下

シテニテモ 親

土エホシ長下ハカリ少刀扇

シテニテモ 鞆

土エホシ着ナカシ少刀扇

アト 太郎官者

如常

入用

かつら桶ふた

秀句傘

シテ

かくれもない大名 ケ様にくわハ申せとも召仕ふ者ハ只壹人

壹人てハ遣ひたらぬ二依て新座の者をあまた

かゝよふと存る 先のさ者を呼出そうヤイくおるかやい

太 ハア

シ あるか

太 ハア

シ 居たか

太 御前

に シ 汝呼出ス別の事でない 夜前の参会にとつとお笑やつたを聞たか 太 如何にも承りました 殿方も御機嫌よ
 さそふ二御さりました シ あれハ秀句とやらいふ事ちや それか面白ひとやらいふてわらハせられた 太 左様な事
 て御さり升か シ 夫ニ付てそち壹人てハつかいたらぬ二依て新座の者をか、よふと思ふか何と有う 太 夫ハ一段と
 よふ御さりませう シ 夫ならハ何程かゝへた物て有うそ 太 夫ハ此方のお心まかせて御さる シ 何ちや身かま、
 ちや 太 左様で御さる シ 某の思ふは大名のせかゝ置よふより一度二とうと八千人斗りか、よふか 太 夫ハ余
 りおひた、敷う御さる それてハ置き処か御さり升まい シ アノ置所こそあれ浦の野山ニむさとはなして置く 太
 此方も思召てもころうせられ人けんか牛馬杯のよふに野山ニいらる、物てハ御さりませぬ 最そつとおへらし被成ませ
 ん シ ア、いつれ野山ニハ居まいナア 太 左様で御座り升 シ 夫ならハへらしとう五百人置くか 太 へりもへり
 ましたかそれでハきやつ等かかんにんかつ、き升まい シ 何にか 太 かにんて御さる シ かにんくそうい
 ふハはみ物の事か 太 左様で御さる シ 夫こそたくさんにある水を吞せておけ 太 此方御思召ても御らふせられ
 人間か水斗りのふていきて居らる、物てハ御座りませぬ シ 何れ水斗のふてハ居まいナア 太 左様で御さる シ
 左右あらハへらそふく 太 よふ御さり升ふ シ くわつとへらいて二タリ置く 太 何ニふたりな シ そち共に
 といふ事ちや 太 是ハ一段とよふ御さり升ふ シ 汝は太儀ながら海道へ往て独りもひとりからと見すまして芸のふ
 の有るりこんそふな者をつれて来い 太 畏て御座る シ 秀句をいへハ猶以てちや 急て行ケ 太 ハア シ エイ
太 ハア シ エイ 太 ハア頼ふたお方ハいつ物を仰付らる、とあつても只今のよふ二わつさりと仰らる、二依て
 御奉公か致よい事ちや 先急て参ふ 誠ニ只今までハ某壹人ておそふしのお使のと色、しんろうをしたか新座の者も参
 らハ行くハ樂をも致そうと存るこのよふな嬉しい事ハ御さらぬ イヤ何角といふ内に海道ちや 先是二休ふて居て似
 合敷者も通らハ言葉をかけ同道致そうと存る ア 是ハ坂東方の者て御さる 某国元て奉公を致し尽して御さる 又都
 八人の心もやさしいと申程に此度都へ登り似合敷所もあらハ足をもと、めうと存る 誠ニ奉公程面白者ハ御座らぬ 国
 元に居ると思へハ都へ登り爰かしこの名所旧跡をも見物致ニ依て此様な面白い事ハ御座らぬ 太 イヤあれへ一段の者

か通る言葉を懸う のふく のふそこな人 ア 此方の事で御さるか 太 いかにもそなたの事ちや そつしなからと
れからとれへ御ゆきある ア 私は奉公の望あつて都へ登る者て御さる 太 それハ一段ちや かゝよふ物を ア あ
の此方かや 太 イヤく 某か抱ゆるてハない身共の頼ふた御方ハお大名ちや 是へ申て出そうといふ事ちや ア 夫
こそ身共か望む所て御さる何卒きもを入れて被下 太 左右あらハ何と今からても御座らふか ア 何時からなりと
も参りませう 太 左右あらハさあく お行きやれ ア 何か扱案内の為其方から御され 太 某から参らふか
ア 一段とよからう 太 誠二ふと言葉を懸て御さる二早東同心の召されて此よふな嬉しい事ハない ア 袖のふり合
もたせうの縁とやら申か此事て御さる 今からハ此方を頼升よひよふ二引廻して被下 太 扱そなたの国はとこ元て御
さる ア 坂東方の者て御さる 太 何も芸わないか ア 是も芸の内て御座らふか弓まり庖丁碁双六馬のふせ起しや
つと参つたを覚へており升 太 何と秀句ハおしやらぬか ア 某ハ已前傘張て御さるか傘二付た秀句ならハ申ます
太 扱ゝ万能に達た人ちや此通り申上たらハ嘸御満足被成るゝて御さらふ ア 兎角此方を頼み升よひよふ二引廻して
被下 太 イヤ何角といふ内に是ちや ア 是て御さるか 太 其方同道したよふ子を申上ふ 先それ二またしませ
ア 心得ました 太 頼ふた御方御さり升か シ イヤ太郎官者か戻たそふな 太 御さり升か御座るか シ 戻たか
く 太 御座り升か シ 太郎官者 太 ハア シ 戻たか 太 只今帰りました シ やれく 早かつた 何と新
座の者をかゝへて来たか 太 一段の者をかゝへて参りました シ とれに居るぞ 太 御門前二ひかへており升
シ ヲ、夫大名ちやといおふ物を 太 それハ私かこゝろへて申しました シ 何ちやいふた 太 左様て御さる シ
やれく 夫は出かいだ 惣して奉公人ハ始メある事か後迄あるといふ きやつか聞くよふ二くわを言ふ程に汝は大勢二
こたへひ 太 畏て御座る シ ヤイく 太 ハア シ おるかやい 太 御前に シ 其机木を呉い 太 畏て御
座る シ せう木く 太 ハアおせうき シ 何と今のを聞ふか 太 お声て御さる程に承りませう シ あれへい
ていおうハ頼ふた者おりふし広間へ出た 是へ出て目見へをせひ 目かまひつたらハ早東御けんそうてあらふす 又目
か参らすは五日十日とうりうの事もあらふ杯と汝か分てふかからせい 太 畏て御さる のふく 居さし升か ア 是

ニおり升 太 今のお声をきかしましたか ア お大名はと有て大きなお声で御さる 太 頼ふたお方おりふし広間へ
 出させられたあれへ出てお目見へをさしませ お目か参つたらハ早速御けんそうて有うす 又お目か参らすハ五日十日
 とうりうの事も有ふ程にそう心得て出さしませ ア 心得ました シ ヤイ 太 ハア シ 夫今度奥より引のほ
 せた五十疋の馬共を引出てゆあらいうせいといへ ナ 太 ハア シ 又表のさむらい衆ニも只居られよふより広間へ出て
 矢の根なり共みかやれいといへ 太 畏御座る シ 今日ハよい天気ちやナア 太 左様で御さり升ス シ 何れもま
 りを召りやう程にかゝりの除能をして水をうてとナア 太 ハア シ エイ 太 新座の者 シ きやつか 太 左様
 で御さる シ 先は利根そうなやつちや 某か目か行とちやつと立たハ出来いたナア 太 左様で御さり升 シ きや
 つか国ハとちや 太 坂東方ちやと申ました シ 坂東方と聞けハ奥ゆかしい何も芸ハ無い 太 是も芸の内て御
 さらうか弓まりほふてふ碁双六やつとおこしやつと参た杯を覚えて居ると申升ス シ あのかやつかや 太 左様で御
 さる シ 扱ゝ万能ふニ達たやつちや乍去其中にいらぬ芸か有るいやい 太 何れも御てうほふかと存升 シ 某ハ馬
 ハ持たすゑのころをとらへて湯あらいをせいと言へ 太 引出して シ 聞ゝ升 シ やい シ 馬のふせおこしてうほうちや
 ナア 太 左様で御座り升 シ なふてかなわぬ物ちや 太 左様で御座り升 シ 何と秀句ハいわぬか 太 是も詠
 して尋ましたかもと傘張て御さつたか傘に付た秀句ならハ申そふと申升ス シ 扱ゝそれハ一段ちや あれへいて言
 ふハ行ゝハ名をも付ふすれ共当分ハ秀句と呼ふ 傘に付た秀句を聞ふ 出よといへ 太 畏て御座る のふゝ行ゝ
 ハ名をもお付けなさりやうか当分ハ秀句とお呼なさるゝ 傘ニ付た秀句を聞ふと被仰るゝ あれへ出さしませ ア 心
 得ました 太 秀句 シ 秀句ハとれからおりやつた ア 嶋から参りました シ はるゝの処太儀てこそあれ先ツ
 こうお通りやれ ア 軒にひかへてまいらう シ 扱ちと秀句かき、とうおりやる ア つれゝに申さう シ つれ
 くてなくとも今聞たいか ア 小骨を打て申さう シ 秀句ハ骨のおれる物か ア 得申まい シ 何ちやゑひ言ふ
 まい ア かみけに候 シ しさりおろゝ シ シテ刀ノツカニ手ヲカケル 新座一ノノ松エニケル 太 何んと致しました シ 今のを聞かぬか秀句
 をいへと言へハゑいわぬのかみけなと、言ふ惣してかみけなと、いふは物の氣なをこそかみけ杯といへあの様な者ハ役

に立まいとつと、いなせ 太 畏て御座る のふ／＼今のよふな事を言う物か ア 最前も申升通り傘二付た秀句ならは申さうと申ました 先嶋から参つたと申ハ嶋ろく呂の事 ぬ申さぬと申たも傘の柄 かみけ杯と申も紙の事 みなから笠に付た秀句で御さる 御機嫌のそこねてめいわくて御座る 太 其通りを言う 申上升只今申たハ皆傘の秀句で御さり升ると申升ス シ とハ何とした事ぢや 太 先ツぬ申さぬと申たハ傘の柄のかみけなと申も紙 何れも傘に付た秀句ぢやと申升 シ 是ハ如何な事 其様な事ハ知らいて秀句か手前へゝめんほくない イヤ思ひ出したあれ江居て言ふハ只今傘二付た秀句かてんなれとも併久敷う召遣ふす 心はへを見ん為に刀の柄に手を懸たれハ只もおかいて傘の柄を追ツ取のへさゝゆる心てのいた所か神妙に思ふ かん忍するならハ扶持をくわつとくれう秀句をきこふ出よといへ 太 ハア シ ヤイ／＼きやつと言ふ事ハ皆秀句ぢやかならずぬかるな シカ／＼秀句へ その通り言ふ秀句出ルヒロラス 傘二付ての秀句ハ聞事ておりやる ア けつこうな御意で御座る シ 何ちやけつこふな アンシテ 秀句ぢやそよ 太 左様で御座り升 シ 此扇をやらう 太 よふ御さりませう是を遣わるゝそ ア それハありかたう御座る シ 何ちやそれハのハの字か傘二付てよひ秀句ぢや笑て是もやれ 刀ヤル 太 是も遣さるゝ ア 拝領を致して置ない 笑 拝領の領の字か猶以て面白此小袖上下をやらふ 太 御無用二被成ませ シ はて扱汝か何を知て早うぬかせい是もやるといへ 太 シカ／＼ ア 色ゝ忝御さる シ 又くわした笑 忝ないのかたの字か傘二付て面白笑 此内ニ太らへ傘 ア 是ハ秀句か手はり二致た傘で御さる 是を進上致すと申て被下 太 心得た ア 能ふ／＼嬉しや／＼一段の仕合ぢや急てすかそう 太 申上升 是ハ秀句か進上致すと申升 シ 何ちや進上笑 進上の上の字ハ傘二付て面白 見テ 傘 ア、是に付て古ひ事を思ひ出した シ 小 雨のふる夜ヲ カサヒラキ 小廻りナリ さむひ物ぢやいかうさむひ物ぢや 笠スホメカタゲルナリ此留様大事ナリ口伝新座シカ／＼アツテ悦ふ事ニ 口伝アリ随分シメラヌヨウニ心懸大事此狂言六ツケ敷ナリ工夫ナクテハ勤マラスナリ

大名

素袍ナシウチ少刀
ヒノシメ刀白ムク下ハカマ

太郎官者 如常

新座者 〃

音曲聶

是は此辺りニ住居する有徳な者て御座る 今日ハ最上吉日なれハ聶殿か見ゆる筈や 先太郎官者を呼出シ申付ふ
 と存る太郎官者有るか 如常 汝呼出ス別の事てないけふハ最上吉日なれハ聶殿か見ゆる筈しや わせたら
 ハこの方へ言へ 太 畏て御座る 聶 エイ 太 ハア 聶シテ 是ハ舅にかわゆからるゝ花聶て御座る 今日ハ最上
 吉日なれハ聶入を致スよふニと申て参つた 又聶入ニハさまゝしき佐法の有る物ちやと申 某はかたのことく不調法
 なニ依て何も存せぬ 又爰に御念ころな御方に物こと御こうしやな人がある 是へ参りてしきさほうをならいすくに聶
 入を致そふと存る 誠ニ此よふな事と存たらハ常ゝ心かくれはよかつた物を今と成てこふかい致す事ちや イヤ何角と
 言ふ内にはちや 先案内を乞ふ 物申案内申 ア イヤ表ニ案内か有る 案内渡そ ハア私て御さる ア エイ誰
 殿よふこそおりやつたれ 先はきれいな出立ておりやる シ 何とゝゝゝよふ御さるか ア 其方か是へ来始てつい
 に見ぬきれいな出立ちやかようすはしあるか シ きれいなこそとふりなれ 私ハ今日聶入を致升 ア やれゝ夫ハ
 目出度事ておりやる 其よふな事と知ツたらハ前広から用をも承ふ物を シ 夫故御無心に参りました ア 夫は何て
 おりやる シ 聶入ニハ様ゝしき佐法の有る物ちやと申 私わ御存の通り不調法ニ御さる 何卒覚へて被下りよふな
 らハ忝ふ存升 ア 某も其様な事ハそらてハ覚へぬ 物のはしニ書て置た見ておませう シ 夫は忝ふ存升 ア 先
 夫ニお待やれ シ 畏て御さる ア 扱ゝ世にハうつけた人もある物ちや 聶入をするに何のむつかしからう あのと
 ふな者ニハ常躰の事をおしへてハ面白ふない 後ゝまて笑草ニなるよふニ覚へてやらふと存る のふゝ御居やるか

是二おります 太 書た物を見ておりやるか大昔中昔当世よふいふてある との髯入を教へてやらうそ 先

もつて忝ふ存升ス 大むかしハ余り古ふ御さる中昔もむかしなり兎角物事当世いよふと申升スカとれ成とも手間のいらぬかよふ御さる ア 扱、其方ハ髯入をおしやれハふんへつ迄か上ておりやる シ おはつかしう存升ス ア 当世様

の髯入か手間か入らぬ是をおしへてやらうそ シ 夫ハ忝ふ存升 ア 先舅の表てまで往ててうしをとる事がある

シ 夫ハお氣遣ひなされ升な てうしか出たらハ酒はかたのことくすきて御座る 随分たへませう ア イヤ、其てうしの事でハない たとへハ舅の門とにて拍子を三ツうつて其拍子を請て音曲に懸て案内を乞ふて其あとを則きんする

事ちや 夫を聞て内から人か出てこなたへと言ふてあらふ 其時内へはいッて座敷へ通る時三はりさしといふ事がある

シ 夫ハ如何よふな事で御座る ア 先三足出て三足戻ッてくるりと廻て又拍子を三ツうち扱下二居て何成ともしきを音曲ニ懸ていふて跡をきんする事ちや シ 扱、存たよりハ六ツケ敷事で御さるお目懸ケらる、故に御相伝被成て被

下て近頃忝ふ存升 ア 左右さへおしやれハ舅か殊の外おほめやる事ちや シ 夫ハ忝ふ存升 舅か引出物を夥敷う用意被致たと承りました 帰りましたらハおすそわけを申ませう ア すそ分をまつてあらふそ シ 左様ならハもふこ

ふ参り升 ア 最早御行きやるか シ ハア ア よふおりやつた シ ハアのふく嬉しや、先急て参ふ 誠ニ髯入二はまとも垣からも目斗りちやと申か某ハ当世よふの髯入をならうて行からハはつともおくする事ハないそ イ

ヤ是ちや トモシニテアトキンスル 髯か参つて候 それ、御申候へ 太 表に何やらむめく音かする 見テ 是ハ髯様てハ御さらぬか シ 中、髯か参つたとおしやれ 言ナリ 太 畏て御さる 申上り髯様の御出て御さる 舅 此方

へと申せ 太 畏て御さる こふ御通り被成ませ シ シカ、ムコ舞へ台へ出ル右之ゴトク シ 早、まいり御礼申そふするを何かと隙を得す迷惑仕候 ト言テキンスル舅笑テ立 舅 扱、きやうかつた事をいわる、ナア 太 左様で御さり升

舅 あれハ先なんとした事ちやしらぬ 太 されハ何と致た事で御さるぞ 舅 あれハ如何二もまとうとちやと聞た誰ぞなふつておこした物てあらふ あの様にあしらわすハ腹を立らりやう程にかならず笑ふな 舅モ髯カトヲリニシテ下二居ルナリ 舅 早ふ申入りやうするを何角と隙かのふておそなわつて候 跡キン スル 舅 御盃を出せ 太 畏て御座る

如常シカ／＼酒之内シキシカ／＼詞ナリ如常二三へん
盃マハリ盃ヲトルヲ見テカラ

何事^もてか事も

諷^ニヒ出ス二人相舞ナリ舞トメ
テ跡キンシテ入ルナリ

シ 簪

段のしめ 素袍 土エホシ 少刀 扇

アト 舅

長上下

アト 太郎官者

半上下

アト 教ヘテ

長上下

賽目

舅 是ハ此当りニ住居する大有徳な者て御さる 未似合敷簪かない とかくさん用のたつした人を簪にとらうと存て

此よし高札を上げた 先太郎官者ヲ呼出シ此よし申付ふ 太郎官者あるか 如常 舅 汝呼出ス別の事てない

そちも知る通り未だ定ル簪かなひ とかくさん用の達した人を簪に取らふと存て高札ヲ上げた 簪が見へたらハ此方へ

言ヘ 太 畏て御さる 舅 エイ 太 ハア引 簪^ニアト 是ハ舅にかわゆからるゝ花簪て御さる 此当り近い所に有

徳な人かひと娘を持たれた 誰ニハ及^{まい}はぬさんかんニたつした者を簪にとらうと高札を上ケられた某ハ片の如く算用

にたつした程に参つて簪にならうと存る 誠ニ有徳な人^とを聞た程にあわれ御縁もあれかし簪になりたい者ちやか イヤ

是ちや 案内乞太郎 出ルシカ／＼如常 ア 高札の表に付て簪か参たとおしやれ 太 心得ました 申上升 舅 何事ちや 太 御高

札の表に付て簪様のお出て御さる 舅 こなたへと申せ 太 畏て御さる こふお通り被成いと申され升 ア 心得た

太 ハア簪様て御さる 舅 エイ簪殿初対面て御さる ア 不案内に御さる 舅 扱高札にも算かんに達た人と書印

ましたかさん用ハとくと覚へさせられたか ア 誠ニ算用の事ハいかよふな事なりともお尋なされ 舅 夫ならハ先尋

ませう 五百具の賽の目の数ハ何程御さるぞ ア 何五百具の賽の目の数な 舅 中 ア 扱 ハ 六ツケ敷い事を
 お尋て御さる 八千斗りも御さらうか 舅 イヤ ハ 夫ハ大キに違ひました ア 夫ならハ七千程も御座らふか 舅
 いかな ハ 太郎官者はハなるまひナア 太 左様で御さる ア せわしい先其そろはんかあらハかせられい 舅 是程
 の事にそろはんか入様な事でハなりませぬとつと、帰らせられい ア 先其様に言わせられな 舅 太郎官者いなしま
 せい 太 早ふ帰らせられひ ア 扱 ハ 是悲もない事ぢや 右之通り言様 智二アト 名乗て 道 誠ニあれハ参つた
 らハ如何様な算用ニテも致そうニ依て氣に入て有うと存るイヤ何是ぢや 案内乞 太シカ 二ア 高札に付て智か参つたとお
 しやれ 太 心得ました ハ シカ ハ 前の如く 太 こう御通り被成ませ 二ア 心得た ハ シカ ハ 太 智
 様で御さる 舅 エイ智殿 二ア 不案内ニ御さる 舅 初対面で御さる 舅 扱此方ニハ算用達て御さるか
二ア いか様な事ナリとも仰られ 舅 夫ならハ五百具の賽の目の数ハ何程御さるぞ 二ア 其よふな事でなくとも余
 の事を尋させられ 舅 先是か承り度ひ 二ア 是ハ六ツケ敷ひ事で御さる五六千斗りも御座らうか 舅 いかな ハ
 是も成まい太郎官者 二ア 先待せられとくと算用いたいてから申そう 両ノ手ノユヒナト ヲ折アシノユヒナトヲサエナトスル 二ア 其まめか
 あらハ壹升程借て被下 ハ シカ ハ 二ア 扱、わけもない事を言わせらる、其様ニ言わすともさん木かあらハ借て
 被下 舅 らちか明ぬ其様な事で智にする事ハなるまいとつと、帰らせられ是もいなしませい 太 畏て御さるさあ
 〳〵お帰りなされ 二ア 是ハ何とするいぬるわひやいはてとうよくな 智シテ 名乗て 某悻の時分よりひた物稽古
 致たニ依て何事成共算用致そうと存る嬉しい事ぢや 是ぢや 案内ヲ乞太郎官者出ルシカハアリ 前ノコトク通ル智舅ニアイサツシ舅五百具ノサイノ目タヌル皆前の通り
ハ それハ心安い事で御さる最そつと六ツケ敷い事をお尋被成 舅 此方ハ中 ハ 算に得させられたそふな先是か承り
 とう御さる ハ 左様ならハ申てお聞かせ申ませう 一チ壹千二貳千三三四四千合て壹万五五千六六千合て算の目の
 数貳万千成りやわか違ひハ御さるまい 舅 扱、こなたハ算用しやて御さる 是迄度、智か見へて御され共こなたの
 よふなすくれた人ハ御さらぬニ依てとれも ハ 返しました最早某の智ハ此方ニきわめましよふ ハ 夫ハ嬉しう御座る
 何と御さらうと存たのに此様な目出度事ハ御さらぬ 舅 扱娘ニも引合せませう 太郎官者 太 ハア 舅 身共か引

合せうすれとも親子の中にハ遠慮もあらう汝是へ呼て来て引合て呉い 太 畏て御さる 太郎官者娘ヲ 樂屋へツレニ行 舅 扱某わ此方を
 を躰に定メるからハ最早うらへ隠居致ス 随分娘と中よふしてはんしやうする様にして被下 シ ころ参るからハ其望
 て御さる其段ハ御氣遣い被成な 舅 なれならハ最早隠居へ参るぞ シカ 太郎官者娘 ツレテ出る舅入ル 太 是れの御兩人をつれまして
 御さる シ なたか娘子て御さるか 娘うなつく シ 是れの躰になるからハ此方とハ夫婦て御さる中ようしませう
 ウナツク シ 扱先対面を致そう程に其絹をぬかしませ 女カフリ シ 扱それハわるい合点ちや対面せひてハすまぬ平
 にとらしませ カフリ シ 夫ならハ身共か取るぞ シテムリニ絹ヲトル此類何ニも同断 女男ヲミテ入る 追入ナリ

三人共半上下

(後二出ル躰シテ)

舅 長上下

太郎官者 如常

女 乙ナリ如常絹カツク

角水

舅 アト 是ハ筑紫の角水と申所ニ住居する有徳な者て御座る 某独りむすめを持て御さる此娘か殊の外哥道に好きて
 御さる 何人ニハよるまい哥道ニすくれた人を躰に取ふと存る 先高札をあげよふ ト言テ如常シテ柱ニ打 一躰アトツ 是
 ハ津の国の者て御さる 筑紫の角水と申処に有徳な人か一人り娘を持たれた 何者ニハ依るまい哥道にすくれた人を躰
 に取ふと高札の承た 某程哥道に心懸た者ハ御さるまい 先あれへ参り躰にならふと存る 誠に某ハちいさい時分より
 哥に好て随分と心懸たニ依てあわれ縁もあれかし躰に成たい事ちや イヤ何角と言ふ内にはちや先案内を乞ふ 物申案

ト言テ如常シテ柱ニ打
 見テ座付

内申 舅 イヤ表に案内か有る案内ハ誰ぞ 殿方で御座る 一アトツ 某ハ津の国の者て御座る 御高札の表に付て参

つて御さる 舅 夫ハ近頃過分ニ御さる先斯ふ通らせられい 一アトツ 心得ました ト言テ舅ノ前ヲ通り 舅 夫にゆる

りと居さしませ 二聲アトハリ 是ハ播磨の国の者て御座る 筑紫の角水と申所に有徳な人か美人の壹人リ娘を持れて

御さる カ路道に 丁急勝れた者を髻に取ふと高札と上ケられて御座る 某ハ哥道にすくれて御さる程にあれい参り髻にならふと存

る 誠ニ我に好キのいらぬ様に存て御さるかひとゑニ是か哥の徳て御さる此後ハ猶ゝ情を出そふと存る イヤ是ちやま

つ案内を乞ふ 物申案内申 舅 イヤ又表に案内か有案内ハ誰ぞ 二アハリ 某ハ播磨の国の者て御さる髻の望あつて

参りました 舅 やれゝゝよふ社出させられ マヤ 先斯ふ通らせられい 二アハリ 心得ました ト言テ舅ノ 前ヲ通り津ノ国ノツキニ居ル

三聲シテ 是ハ何の国の者て御さる筑紫の角水と申所に哥道ニ勝れた者を髻にほしいと有る高札ヲ上られたと聞た 身

共ハ随分和哥ニ勝れて御座る程ニ某参り髻に成りニ参らふと存る 舅ハ殊の外有徳など申程に行ゝハ樂をも致そふと

存る イヤ是ニ高札か有る何にゝ哥道に勝れたる者を髻に定むる事はちや 先案内を乞ふ 物申案内申 舅 又表に

案内か有る 案内ハ誰ぞ シテ 某ハ河内の国の者て御座る 高札の表に付て参りました 舅 夫ハよふ社御出やつた

れ 先斯ふ通らせられい シ 心得ました ワキサヘ行ハリマ 舅 扱何れも遠路の所を様御出て御座る 高札ニハ和哥の

道ニ勝れた人を髻に取らふト書記しました 何れも歌道ハ御心得被成て御座るか 一アツ 高札ニ付て参りました程

に何卒よふて見ましょふ 二アハリ 某もよふてみましょふ シ 身共も読ふて見ましょふ 舅 夫ハ近頃満足したい

た 扱何れも国ハ何とやら被仰たのふ 一ツ 某ハ津の国て御さる 二ハリ 身共ハ播磨の国て御さる シ 某は河

内の国て御さる 舅 扱 何れも遠方の所て御さる 左様ならハ某かたいを出しませう 則所の名ニて角水と申だい

ニて何れも一首ツ、読せられい 三人 心得ました 一ツ いさそれならハ読せられい 二ハリ 先こなたから読せ

られい シ 先読せられい ツ 左様ならハ出かちニ数そふ ハリ 夫ハよふ御座らふ シ よふ御座らふ ツ

こふも御座らふか 舅 はや出しましたか ツ 西の海千尋の網を角水て水わくゝりて魚そとゝまる 舅 是

ハ中ゝ面白ふ御さる 扱こなたわ何とて御座る ハリ こふもいわれませうか 舅 何とて御さる ハリ 播磨神如何

成人の角水で筆ハ走りて文字はとまる

舅吟する

舅

是も面白い事で御さる

こなたも読せられたか

読ました

舅 何とて御さる

河内なる早田を人の角水で一ト本植て千本ニそする

舅一ミ
吟スル

舅

扱く何れも和歌の道に

勝れた衆ちや 何れをいつれと申分ケハならぬ程に此上ハ娘を呼出シ何れ成りとも娘か目利次第二致そふ 三人 夫ハ

一段とよふ御座らふ

舅業屋入り
娘ラツレ出ル

ツ

何卒聲に成りたい物で御さる

ハリ 何れ江札が落ませうやら知れませぬ

左様で御さる

業屋より出ル

舅

是ハ某の娘で御さる

いつれ成共聲に成せられた御方に此家を渡シ升ス 幸けふ

ハ日柄もよいニ依て身共ハ隠居致す

随分娘と中よふして家相続するよふにして被下

ツ

その段な御氣遣被成ます

るな ハリ 成程心得ました

畏て御さる

舅タイコサ
エサツク

先そなたから御対面ハ何とて御さる

ハリ

先被成ま

せい ツ

扱く是ハはつかしい事で御さる

ハリ 言せらるゝ通りて御さる

ツ

と申ても済ますまいお先江致升

せう 二人

一段とよふ御座らふ

ツ ハア舅殿の仰せて御さる程に先対面致そふ

ト言テソハエヨリ願ラミテキモラツ
フス橋懸リエニケテ

ハつちやこわ物あのよふな女と一日もそわるゝ物か先急てはつそふ 逃入ナリ ハリ 左様ならハ私から対面致

ませう

一段とよふ御座らふ

ハリ

とれく 舅殿の仰せて御さる

某もお近付ニなりませう

ソハエヨリコレモカラ、
見デシテ柱エヨリキモラツフシ

ハリ

扱く恐敷い顔かな あのよふなきりやうも有物か急て逃て参ふ

ト言テ逃入其時女立テ
河内ノ聲ヘヨリ

女 申く

何て御さる

女

扱く縁と申ハいな者て御さる三人の内ニこなたか童か氣ニ入りました

扱く夫

ハ嬉しい事で御さる して只今の二人リハなせにいなれました

スコシコミロ
ナイヲモムキ

女 あれハ童か氣に入ませぬニ依てい

なしました

左右あらハ中よふ随分家はんしやうするよふニ致して御さらふ

女

夫ハ嬉う思ひます

れならハ対面致そふ 其きぬをとらしませ

女

是を取る事ハいやて御さる

そふ云ていつ迄もそふしていらるゝ

物か平にとらしませ

女

とふあつてもいやて御さる

シ

夫ならハ身共か取て進ませう

ト言テキサヌトリカラミ見デキモヲ
ツフシサシアシシデワキサエニケテ行キ

シ

是ハ如何な事あれハ化物そふな

女

申く

何て御さる

女

こなたハ最前

何角と言わせられたか今更童かいやて御さるか

ト言テソハエ行
シテノ手ヲトル

シ

イヤてハないかちと用かある

先そこをはなしてお

くりやれ

女

イヤくとちゑもやる事ハいやて御座る

シ

あれく

ト言テワキサエユヒヲサシ女見テ
ハヤス其内ニケル

シ

のふく嬉し

やく 女 ヤイワ男とちへゆく シ ア、ゆるしてくれい

シテ 聲

津国播磨シテ河内のしめか嶋懸素袍三人共袴

アト 舅

クル土烏帽子少刀扇
のしめ長上下ワキ狂言ナレハ素袍土烏帽子

アト 女

ふり袖白乙面カスラ
如常カツキ

六人僧

シテ 是は此辺りの者て御座る 某後生大事と心懸るニ依て仏詣を致ス 又爰に申合せた人か兩人御座る 同道致そ

ふと存る 道行 誠ニ後生程一大事の事ハ御さらぬ 此度諸国廻り仏参致スと申ハ有かたい事て御さる イヤ何角と言

ふ内にはちや 物申案内申 一ノアト イヤ表に案内かある案内ハ誰ぞ 某て御さる エイ誰殿よふこそ御出

被□たれ 最早時分もよふ御さるニ依て誘引しました 夫ハ忝ふ御さる 誰殿も是に待ていられ升 夫は幸

いて御さる のふ 誰殿誰殿か誘引わせられました ニノアト 何誘引られましたか 左様て御さる 左右あらはいさ

エイ誰殿よふこそ誘引わせられた 今日ハ天気もようて一段て御座る 其通りて御さる 左右あらはいさ

参り升まいか 兩人 先行かせられい 身共から参ふか 一段とよふ御座らう サア御され

兩人 心得ました 誠ニ長旅の事て御座る程にしせん腹の立事か有ふともたかに堪忍して同道申まいか 言

わせらるゝ通りされ事もせてハ叶ぬ ちとこわされても旅は淋しい所も御さる程に互に堪忍したかよふ御座る 言

腹の立事ハみなくきんせいに致シませう よふ御座らふ イヤ是まで参つたれハ殊の外草臥ました 兩人 言わ

せらるゝ通り草臥ました イヤ幸是に辻堂か御さる一ト寝入致て参るまいか 兩人 よふ御座らふ サア

何れも休ませられい 兩人 心得ました 三人共シカク
辻堂ニ寝入ルアト兩人ヲキル アト二人 よふ寝た事かなく 二 イサ参り升まい

か 一 イヤまた誰殿か寝入て、御さるおこしますまいか 二 おこさせられい 兩人 誰殿くくく 一 扱

く寝むい事かな こかいてもゆすつても目か覚ぬ 何と坊主にせまいか 二 むさとした事をおしやる いか二たわ

むれちやと言ふても夫か成る物か 一 何事も腹を立ツまいと約束をした二依てくるしう御座らぬ アト髪ソル
頭巾キセル

今一人ハ笑止メキノ坊主ニスル
後ハ手伝ウ二人シテ坊主ニスル 一 扱く気の毒な事ちや 二 先一方ハ刺たか片方ハ何としよふそ 一 耳へ水を入れたら

ハ寝かへりを仕ふ其所で剃らう 一 一段とよかろふ 両手ニテ水ヲスクイ耳ヘ
イレルシテ寝カヘリスル 剃ルシカくアリ 一 又休ふ 二 よふ

御さらふ シテトナラモ又ネルシテヲキテ二人ヲ
オコスアトヲキテヲトロク 兩人 よふ寝た事かなくのふくはよふおきさせられぬか 一 兩人 よふ

寝た事かなく 一 ヤア其方ハ何として法鉢をした 二 ヤアなせに坊主ニならしました 一 身共か何とそしたか

ウミヲ扱はお主達ちやな 頭ヲナデミ見テ肝ヲ
ツフシヲトロク 兩人 イヤく身は知らぬ 一 是程の事をそち達か知らぬと言ふ事か

有物か 一 たとへ某共かした二もせよ最前腹をたつまいとかとふけいやくをした 堪忍したかよい 一 是か何と堪

忍の成る物ちや 二 左右言す共了簡のしておかします 一 イヤく是ては往ても面白ふない 身共戻るぞ 先江出ル

兩人 行たくハ勝手次第におしやれ 笑 一 さあく御されく 大コサエ
クツロク 二 心得たく 一 扱く腹の立事

ちや 此意趣か返へしたい物ちやか イヤ致しよふかある アトヘモ
トル 思へはく腹の立事ちや 一 かにたわむれちや迎

是様に坊主ニすると言ふハ言語道断腹の立事ちや イヤ何角と言ふ内に是ちや 物申案内申 橋懸リノ口ニテ案内乞テワキサエ
ユク女ニノ松ニテ

一 女 イヤ表に聞なれた声で案内か有る 舞サヘ
入り 二 ヤア其方ハ何として坊主になりましたぞ 一 されはの事ち

や此鉢になるハ何とも面白ふない事ちやなみたかこほれて言われぬ ナク 一 女 夫ハ心元ない何事で御座る 一 兎

角有様に言わねハ済ぬ事ちや 高野の道にきの川と言ふ大川がある 三人手を引合せて渡つたおりふし水の出はなて有

た程に先ツおかへおわかりやれと言たれとも二人りハ聞入れもせず渡つた 真中てころんてつんふりくと瓜などの流

る、様に有か終におほれて死なせられた 某の存るハ身共も身を投ふと思ふたれともせめて某かそなた達江知らせずハ

誰も知らする者ハあるまいと思ふて面白ふないさまを替へて戻ツた ナク 一 女 夫ハ誠に御座るか 一 はて何の偽

りを言ふそいの 一女 扱もく此よふななさけない事ハ御座らぬ ナク 扱誰殿の方へも知らせすハ成るまい

一女 幸ひ是へ留主見舞に來て居られ升 呼出ス のふく誰殿が見へました 二女 なに誰殿が見へましたかエイ其方

何として坊主ニならせられた 一女 されハの事で御さる高野、道に紀の川と言大川か有て二人りは水におほれて死れ

たと言ふて誰殿か知らせに見へました 二女 ヤアそれハ誠て御さるか 一 何しニ偽りを言ゝませう 一女 扱も

く是はかなしい事でハ御さらぬか ナク 二女 此上はふち川へ成共 女二人 身をなけて死ませう ナク 夫程

に思わし升ならハ尼にならしませ 女兩人 左様ならハ尼に成て念ころに跡を弔ひませう 一 扱く夫ハよい心さし

ておりやる左右あらハ是江よらしませ 女兩人 心得ました 後見サエ入尼にナル 一 扱此髪は何としませう 二女 童

も何としませうそ 一 それハ某か高野へ納ふ程に是へおくさしませ 女兩人 左右あらハよいよふ二頼み升ス

髪ヲ兩人共シテニ渡スシテ 一 某わもふこふ行そ 女兩人 最早御座るか 三人 サラハくく 女ナキナカラ 一 笑テ

懐中スル さつとすんたまた仕よふか有る 逆廻り 一 兩人の者ハ何と致た存せぬ アトタツテハシカ、リヨリ 一 サアくいさ参り

升まいか 二 よふ御座らう 一 ゆるりと休息致た 二 其通りて御座る 一 扱誰は何と致た事ちや存ぬ 二 い

こふ腹をたてられました シテ二行 一 エイ誰殿 是ハ先何として御座つた 二 されハ何として御さつた 一 某ハ

そち達に恨かあるニ依て來まいと思ふたれとも年内のよしみを思へはしらすニハおかれぬニ依て迎の為又出て來た

一 夫ハ心元ない何事でおりやる 二 何事でおりやる 一 イヤ外の事でもない 汝等か此度高野へ参るハいつ

はりて何れも心よしをこしらゑておいて其方へ往とあつて誰言ふ共なく女房達か聞て殊の外腹を立兩人共自かいして死

れた 一 意趣返へしに分別もない事をいふ 一 夫ならハよふおりやるかお主達か為ちやと思ふて知らせに來たか

夫ならハこふ行そ 二 ア、是くとふやら氣味かわるいありよふニおしやれ 一 誠ニ是は女共の髪ニ違ひハない ナク 此ちぎんた所を見れ

くハ此髪をお見やれ則是ハ高野へ納に行のちや 一 誠ニ是は女共の髪ニ違ひハない ナク 此ちぎんた所を見れ

ハなかしい 二 此赤毛の交つた所かうたかいもない女ともの髪ちや ナク 一 是もせんぜの約束て有ふ某も此よふ

二なつた程にそち達も坊主ニ成て跡を弔ふて遣らしませ 兩人 兎も角も其方を頼む 能かろうよふニしてくれさしま

せ 左右あらハ先是へよらしませ 兩人 心得た 三人共クツロキ坊主ニ成リ
 御りやる 能ハあれへお出やれ 兩人 心得ました 頭巾キル十徳ナトヲ一人キルモヨシ

又古郷も此後た久敷う見舞ぬニ仍てなつかしい程に先在所へ寄て行ふそ 一段とよからふ 廻ル 誠ニ

此後はたかに腹をたぬよふに諸国をめくろうそ 夫ハ一段とよからう 女正ウチネシフツ言テ出ル
 ハシカミリノ口ニテ行合ふ 女二人 南無阿

みたア 南無あみたん仏なむあみたア アト二人 そちハ女共てハないか 女二人 こちの人てハ御さらぬか

シテ大笑ニテ 是ハ先何とした事ちや 女二人 其方達か水におほれてお死やつたと言て誰殿か見へましたニ依てケ

様な姿に成りました シテハラウ 笑 扱分ケもない腹の立事ちや あの者の内儀も尼にせまいか 二 よふ

御さらう アは是それハゆるしてくれい 女シカ 六人 笑 昔からこわされハせぬ物ちやと言ふ

かいらぬ事をめさつた故此よふニ成た 所詮是をほたいの種として後生を願かふ 各 是ハ一段とよふ御座らう

シカ 有テ 三人共に修行に出ふ程にそなた達ハ留主をおしやれ 女三人 心得ました やかて目出とふ帰らせられ

男三人 左右あらハ行そ 女三人 あら名残りおりや 男三人 此方も名残りおしけれとあの日を御ろうせ 女三人

山の端に懸た 男三人 めい さらりと梅ハほろりと落るとんもまりハ枝二とまつた 女三人

トミ、イヤア

シテアト男三人 狂言上下クミリ羽織も交ル管笠着ル

アト女三人 後十徳水衣白コウシ
 如常後の花の帽子

鉦鐘木

鬼の継子

女 越中の国昔くらの里に形部三郎と申者の妻で御さる 童かつれやいハ去年の秋おしにやたニ依てそれより面白からぬ月日をおくる事で御さる 又親里から折く参るよふニと申ておこさるゝ程に先あの方江行ふと思ひ升ス 誠ニ形部三郎に分れた時は当座に髪をおろしさまを替ふと存て御されとも此わすれかたみに心か引かされて一日く延る事で御さる 思ひの外けふは日も晩した其上人通りもなし 何とやら気味のわるい事ぢや 出ル 人くさいく是ハ只ならぬ事ぢや されハこそとつかもうく 女 のふおそろしやく 女 やい 己は心のふといやつぢや 此処ハ七ツ下れハ人の通ひもなひニ殊ニ女的身として只壹人通るいたつら者であらうふ 女 イやいたつら者では御さるぬ命を助て被下 ムミぬかしおる己只一口にふくせうと思へ共見れハよふきもよいニ依て不便ニ思ふ 心靜にふくする程に左右心得い 女 童ハ越中の国昔倉の里に形部三郎と申者の妻で御さる 親里江用事か有て参り升ス 女 扱は形部三郎か妻か 女 左様で御さる 女 是ハ如何な事 誰そとこそ思ふたれ三郎か妻ぢやよふ 越中の形部三郎ハ去年の秋死たか其後外の男をもたすに居るか 女 其方ハ知たよふにいわせらるゝか 形部三郎ハとうして御存ぞ 女 ふしん尤ぢや 形部三郎は娑婆のこふかふかに依て地獄^{ママ}へ落て夜に三度日に三度のせめを請け我ゝか役として朝夕手にかくるに依てよふ知て居る 女 のふかなしや さま 仏事をなし跡をも弔ひ升るか其かいも御座らぬわいの 扱先とのよふな所に居てとのよふなせめにあはれ升ス 女 いこう罪か深いニ依て地獄^{ママ}江落 中ニも三郎か伯父の馬を貰ふて来て老馬の齒をもき四足より血を取て若馬に作りなし白い所を墨て塗て他御の市江引て居てうつた 此罪甚かるからすゑんま王のいかりつよく舌をぬかれうすてはたかれ残る片時もやすい事ハない 女 扱もくそれハいたわしい事で御さる とふそ此方を頼み升る程にゑんま王とやらん江よいふニ仰られて形部三郎殿を極楽江やつて被下 女 そちか頼む事ならハかなへてもやらうか乍去身共か言ふ事を聞ふか 女 三郎殿を極楽へたにやつて被下るゝならハ何成共いわせられい き、ませう 女 イヤ別の事でもなひ爰にふくろびかある ぬふてくれぬか 女 のふおそろしやく 鬼の妻にならるゝ物かいやい 女 笑 ほころひをぬふてくれいと云へは妻せんさくを召されて一入心かひかさるゝ 此上ハ何をかくそう身共は此年に成るか妻を持ぬ 近頃言ゝかねたかとふそ身共か妻に成てく

れさしませ 女 のふ物狂^{フキヨウ}やのゝ 鬼の妻にならるゝ物かいやいゝ iya ならハ己一口にとつてかもう
 女 ア、それならハ先ツ待しませ 待^シとハ何んと 女 爰に形部三郎か童と中の忘れかたみか御座る かわゆかつ
 て被下るゝならハとう成としませう 忘れ^シかたみとハ何の事ちや 女 是れ此よふな子か御さる 何に子か有
 扱、おもにを持て居るなア とれゝ見せい 女 何んとうつくしい子てハ御さらぬか 是ハとふやらよふこへ
 たうまそうな者ちや 女 のふゝおそろしや 大事の子をうまそふなど言ふ事か有る物か イヤ其様ふな物は蘭
 こたへかあるまいつれて往ては役二たゝぬ捨て来い 女 扱もゝとふよくな此子故にこそ面白からぬ月日をおくれ此
 上は童と共にいかよふ二なるとても此方の妻に成り升すまい もつけな事をいゝ出した是悲二及ぬ其子供につれて
 来い 女 夫ならハ行ましよふ 是ゝこのつゝみを持て被下 身共ハついニ包^シ杯ヲ持ていた事ハない 女 包を持
 ハ子か抱かれぬ それならハ行ますまい はていかふたかはるの 是悲に及はぬ どれ持てやろう 包^{包モツ} さあ
 〳〵おりやれ 女 心得ました 扱地嶽^{マダ}は恐敷所と聞しましたか此上ハ随分此子をかわけかつて被下 其段ハ氣遣ひ
 するな 地嶽^{マダ}ゝといへとも住は都てとつとよい所ちやわいやい 女 また程ハ遠ふ御さるか あれゝあれに見
 えた所か地嶽^{マダ}ちや 女 夫ならハ童も帶を仕直して行ませう程に其間此子ヲもりをして被下 とれゝこちへおく
 せ 子^{子ヲトル} 見テ^{見テ} 笑 よい子ちや 扱も形部三郎によふ似た鼻のきよいと高い処か其まゝちや 笑ヲゝ なくハほへなく
 かしましいがきちやナア 女 のふゝ其様ニゆうてもりかなる物か其方の顔かこわいニ余り大きい声をさせらるゝニ
 依てそれ故なき升 あいをしてやさしうさせられいの とれゝこゝろへたきけんの直そう そりやくつゝゝ
 〳〵そりや機嫌か直た 笑 何ぞ芸^ガあるか 女 なんても御さる とれゝ塩の目を見ませう しほの目ゝ
 〳〵笑 女 今度ハかふゝにさせられい とれゝかふゝゝ 笑 今度ハあわゝにせうとれとゝもせうあ
 わゝゝゝ 笑 アゝ又ほへた 女 余り大きい声て笑わせらるゝニ依ての事ちや とれゝ今度ハかま車ニ乗せ
 う ウ^{ウキニ} ナ^{ナル} れろゝれろやゝ 鬼の継子をかたニのせてゝゝ 地嶽^{マダ}へまいろう 又 今度ハまた機嫌^カの直らぬ か
 ましい又ほゆるはめんとうな 只一口にふくせうそ 女 のふ恐敷や其様なて何とそわるゝ物ちや いとしの子やモ

ウ行事ハイやて御さる シ ヤイ シ 己にくルとてにかそふかヤイ女めとつちへうする やるまいそ 女 とれ
 くちを吞せませうこちへおくせられい シ ハア、今思ひだした祝言の盃をして行ふ 女 夫ハよふ御座ろうか酒
 か御さるまい シ 酒ハ身共腰に有る カツラ桶フタヲ
トリニ入ル内ニ 女 幸ひの事で御さる 鬼を酒に酔せて其内にてけて帰らふと思
 ひ升ス ワキサエ
立テ言ふ シ サア シ 祝言の盃は女房のかたから吞む物ちや 其方初メさしませ 女 夫ならハ童から初メま
 せう シ サア シ お呑みやれとふ 女 ヲ御さる シ ノム 是を此方へ差しませう シ とれ シ 頂戴
 こう 女 童か酌を致ませう シ 頼むそ 女 とふ シ ヲ有そ シ ノム 扱是をそちへやるそ
 女 最壹ツあかりませい シ 左右あらハ最一ツ吞ふ 女 よふ御さるふどふ シ ヲある シ ノム ホ
 是をそちへやるそ 女 童ハもはや吞ませぬ シ 左右いわす共お呑やれとふ 女 何程言わせられても吞め
 ませぬ シ とれ肴致そう アカキハ酒ノ
トカソヲ諷ふ 笑 女 イヤ肴か御座てもこれハ吞れませぬ シ 夫ならハすけてやらふ
 ノム 女 すけて被下 シ サア シ すけたそ 女 忝ふ御さる シ ヲいかふ酔た 女 最壹ツ吞ましませ
 其様に吞ふたらハ足腰か立まい 女 足腰かたゝつわ童かかたにかけませう シ 何ちやかたニ懸ふ 女 中 シ
 笑 女房ハ持へい物ちや夫ならハ最壹ツ吞ふ 女 よふ御さりませうとふ シ ヲある シ ヲある シ ヲある シ おそ
 ほれ升 シ 笑 酔テネル 女 のふ シ 嬉しや シ 先急てにけて帰らふ シ 女房共とれへ行そ 女 のふ シ おそ
 ろしや シ 己身共を酔せてにくるとてにかそふかとつちへうする やるまいそ 女 のふ シ 嬉しや シ
 やるまいそ シ

シテ鬼 鬼頭巾 唐織ツホマリ下クミリ
 酒吞時其瓢腰ニツケル杖
 アト女 如常 包頭巾 子懷中スル

アト 是は此辺りの者で御さる 某一在所の老若寄あつまつて今生後生の為六地藏堂を建立致て御さる 未御本尊か御さらぬ 此度都へ登り六鉢の地藏をあんちいたいて参ふと存る 誠二久々の念願で御座つたに思ふ様に堂は出来テ此よふな嬉しい事ハ御さらぬ 此上六鉢のお地藏さへ出来れば何れも願ハ成就致スと言ふ物ちや イヤ何角ト言ふ内に都ちや ハミア賑かな事かな 某の在所杯とは違ふて家居杯もきれいな事ちや イヤ某わはたと失念致た事か有る 仏師屋を存せぬ 在所で徳ととふてくれハよかつた物をはるの処をといにも戻られす是ハ先何とした物で有ふそ ハミアさすかわ都ちや 売買ふ者も呼はつて通れハ物事調ふと見へた 某も此当りから呼わつて参ふ シミ申そこ元に仏師屋は御さらぬか仏か求とふ御さる仏かをふく シテ 是は洛中ニ住居する心のすくない者で御さる あれへ田舎者と見へて何やらわつはと申 きやつ二たつさわつて見よふと存るヤアのふくのふそこな人 ア ハア此方の事で御座るか シイかに其方の事ちや 此広ひ海道を何をわつはとおしやる ア 田舎者の事で御されハリやうしハ申さぬ 真平御免なれ シイヤくりよふしをおしやると言ふてハない 事ニ寄たらハ叶へておませうかと言ふ事ちや ア 夫ハ忝ふ御さる 私わ仏か求さニケ様ニ呼はつてあるき升 シ 其仏師屋を知ておいやるか ア 是ハ都人とも覚へまぬ 存せぬニ依てケ様に呼わつてあるき升 シ 是ハ身共かあやまりちや 扱ゝそなたハ仕合な人ちや ア 仕合と申ても こう見へた通りの者で御さる シイヤく其よふな袖妻ニ付た仕合てハない 某ニお合やつたか仕合と言ふ事ちや ア 其方ニ逢たか仕合とハ何とした事で御さる シふしん尤ちや 洛中ニ人多しといへ共其方の御尋にや某ハ真仏師でおりやる ア ハツちやこわ物つうとあちへ行かしませ シとは何んとした事ちや ア 其方ハまむしとハおしやらぬかさゝれてハならぬ シイヤくそれハそなたの聞ゝよふかわるい まむしてハない真仏師と言ふ事ちや ア 仏師ならハ仏師でよからうに真仏師とハ何とした事ちや シ不審尤ちや 昔運けいたんけ御阿んなみと言ふて仏師か三なかれ有た 運け御もたんけいも跡かたへて安阿弥の流某一人ちやニ依て真仏師と言ふ事でおりやる

ア すれハ身共は仕合な者て御座る 左右あらハ仏か求とふ御座る見せて被下 シ イヤ／＼其よふニ御仏を作てハ置ぬ 何成共好ましませ よかろう仏を作ておませう ア 別の事ても御座らぬ一在所の者か寄集まつて六地藏の堂を建立致て御座る程に六鉢の御地藏か求とふ御座る シ 扱／＼夫ハ大願のおこさし升た 扱は六地藏の有かたひ子細を知て居さしますか ア 何をも存ませぬ シ 左右あらハ言ふて聞かせう とくと聞かしませ ア 夫ハ忝ふ御座る

シ 先一鉢ハのうび地藏とて錫杖を持て無間の苦をすくひ給ふ 又一鉢ハ無二地藏とて本願をもつてがき道の苦を助ケ給ふ 今一鉢は珠数をもつて畜生道の苦げんをすくい給ふ 一鉢ハ鉢を以て修ら道の苦患を助ケ給ふ 一鉢ハ手を合せてテンタウノ苦患を助ケ給ふ 一鉢は衣を持て人道万事をすくい給ふ なんほうありかたい御仏てハ御座らぬか ア 扱／＼難有い事を承て忝ふ御座る 一在所の者に聞かせたらハ悦ひませう 扱六地藏ハいつころ出来升 シ 何れ三年三月も懸らふか ア 夫ハ余りおそふ御座る 田舎者て御されハ 其様にとりうハなりませぬ 何卒早ふ作て被下

シ 早いとおしやれハあすの今時分 ア 先は合点か行ませぬ 三年三月と明日の今時分ハそくはくの違ひて御座るか 何とした事て御座る シ 不審尤ちや 某弟子あまた持た 急きとあらハ身くしハ身くし お手ハお手お足ハお足とつくらせてにかわかけんのまん／＼としすまして片端からへつた／＼と付て廻るニ依てあすの今時分 又三年三月と言ふハ某か一細工ニするニ依ての事ちや ア 成程尤て御座る とても事に其方の一細工か望みてハ御され共田舎者て御座れハ長かふ逗留ハなりませぬ 夫ならハあすの今時分に作て被下 シ いかニも作ておませう ア 扱代物は如何程て御座る シ 万疋ておりやる ア 夫ハ余り高直に御座る何卒まけて被下 シ イヤ／＼仏ニおゐてまけハない いやならハおかしませ ア 如何ニも求ませう 扱とこ元へ取りニ参りませう シ とても教へたり共得御出やるまい 因幡薬師の後ろ堂て渡て有ふそ ア いかニも心得ました 扱代物は三條の大黒屋て渡すて御座らふ シ 大黒屋存て居る あれて請取て有ふそ ア 左右あらハあすの今時分ニ取に参るて御座らふ シ あすハ早／＼御出やれ ア 左右あらハもふこ参る シ お行やるか ア さらハ／＼／＼ シ よふおりやつた ア ハア 後見サエ クツロクエ 田舎者をまんまとはかつてハ御座れ共某ハ生れ付てよふし一本けすつた事ハなけねとも先只今のよふニ申た 又爰に友達

共がある 呼出シ相談致そうと存る

藥屋
へ向イテ

ヤイ／＼皆の者用か有来さしませ

某共を呼ハ何事ぢや

何事ておりやるぞ

シカ／＼アツテ
三人共下ニ居る

最前田舎者か仏師を尋てありく／＼依て某か仏師に成て何事そと言うたれハ

一在所として六地藏の堂を建立したニ依て六牀の地藏を求メたいと言ふた 兩人 ムウ 物は聞て置事ぢや 以前仏師に近付か有て六地藏の子細を聞て置たニ依て幸ひの事ぢやと思ふて語てきかせたれハ殊の外ありかたいと言ふてよろこふた 左右てあらふ共 二 して何とした 則六牀の地藏を万疋てこしらへてやる筈に約束をした

して其六地藏ハとこに有るぞ

されハ相談と言ふか其事ぢや 因幡薬師の後ろ堂て見せうと言ふて置たニ依て

おぬし達や某や地藏ニ成て居て代りさへ取たらハ能い間を見て逃て戻るまいか 一 是ハ一段の分別ぢや 二 乍去

地藏六牀人ハ三人ならてハないか何とする 夫ハ三牀ツ、所を替へて居やうてハないか 兩人 是ハ一段とよかる

ふ 兎も角も身共ニまかしておかしませ 幸道具もある程に形ちを取りつくろふておくりやれ 兩人 心得た

後座ニテ形ち替ル二人共十徳キルコウシ頭巾一人ハ
水衣ニテモ持物一人ハ衣一人ハシユスシテハ手ヲ合ルシテ持テ出ルナリ

何と拵はよふおりやる 兩人 如何ニもよふおりやる

左右あらハあれへお出やれ 兩人 心得た 二人共ワキサへ行キ
シテ名乗サへ出ル 扱／＼おぬし達ハ其儘の地藏ぢや 兩人 何とよふお

りやるか 某ハ田舎の者に逢ふて処をおしよふ程にそふ心得さしませ 兎も角もおしやれ 心得た 田舎

人ハお行きやつたかしらぬ 一 よふ／＼約束の時分ぢや 先急て参ふ お地藏か出来てあれハいしか仏師殿 一 エ

イ田舎の人 一 是ハとれへお行きやる 其方かをそいに迎に來た 一 すれハお地藏ハ出来て御さるか 一 い

かニも出来て有る程に是を真直に往て左りへ行当る所ニこもかたれてあらふ程に其こもを上げて見さしませ御仏か出来

て有うぞ 夫ハ忝ふ御座る 某も此辺りに居よふ程に惡ひ処もあらハ仏師と言ふて呼ハしませ直に直しておま

せうぞ 心得ました 先往ておかみませう 急ておかみませ 心得ました のふ／＼嬉しや／＼早や出

来て有るとおしやつた 是を真直にいて左りへ行当る所にこもかたれて有ふとおしやつた されハこそこもかたれてあ

る先上ケて見よう ハゝア作たり／＼ 先納ふ 是ハはやいきて御さるよふな ウヲ、扱、合点の行ぬ 身くしかあ

た、かな 扱残りの三牀はとれに御座る知らぬイヤ是に御さる 扱／＼とれも／＼よふ作た 是も身くしかあた、かな

其上御いんそうハちと違えとも今の三^ニ牀^トの其儘のお地藏ちや　とてもものに一所において見たい物ちや　仏師殿を頼
 もう　仏師殿く　シヤアく　ア　仏師殿で御さるか　シ　是におります　ア　先は早速作て被下て忝ふ御座る
 シ　何と氣に入りましたか　ア　ちと合点の行ぬ事か御座る　シ　何事で御さる　ア　身くしへ手を当て見ましたれハあ
 たゝかにこさつたか何とした事で御さる　シ　イヤ爰な者か　身くしへ手をあつると言ふ事がある物か　ア　すれハ当
 てぬ物で御さるか　シ　当ぬ物と言ふてはないか夫ハに皮^カかひぬニ依ての事ちや　ア　其上御めんそうも氣に入ませぬ
 直て被下て六^ニ牀^ト一所に見度ふ御さる程に一所に見せて被下　シ　如何ニも御いんそうを直スハ安い事ちやか急きとお
 しやつたに依て三^ニ牀^トハ上京の弟子に作らせ又三^ニ牀^トは下京の弟子に作らせましたニ依て二^ニタ^ト処に置た　其上処かせもうて
 一所にハすへられす惣してせまい所に一所におけハきうくつに思召て願ひ人に必はちか当る事でおりやる　ア　左右あ
 らハ兩方一所に見^ニ合^セてとふ御さる　シ　夫程におしやれは兎も角もさしませ　ア　そふあらハ又拝みませう　シ　拜ま
 しませ　ア　心得ました何卒一所にならへて拝みたい事ちや　是ハ如何な事お地藏かない　はて合点の行ぬ　こちらに
 もない　是ハ何とした事ちや　エイ仏師ちや　三人　仏ちや　ア　仏師ちや　三人　仏ちや　ア　扱く己ハ悪ひやつ
 の　三人　アゝゆるしてくれい　ア　何としてくりやうそ　三人　ゆるしてくれい　ア　アノ大ちやく者やるまい
 そく　三人　ゆるして呉い　く

シテ仏師

水衣　コウシ　下クミリ

アト二人

壹人ハ半上下クミリ　壹人リハムキトウクミリ
後十徳コウシ二人共

田舎人

半上下クミリ

入用

珠数　衣　玉　シヤクシヤウ
鉦シモク　一人シテ手ヲ合す